

2025(令和7)年度 第3回初任者 SD 研修 「学び続ける大学職員がつくる未来」開催報告

日 時: 2025(令和7)年 12月 12日(金) 14:00~16:55、情報交換会 17:00~17:45
会 場: キャンパスマート大阪(大阪市北区梅田1-2-2-400 大阪駅前第2ビル4階)
講 師: 佐藤 浩輔 氏(大阪体育大学 庶務部 学長室担当 チーフ)
橋本 健 氏(大阪女学院大学 管理課 課長)
受 講 者 数: 8大学 15名(申込者数:8大学 15名)
内 容 詳 細: 大学コンソーシアム大阪 HP 掲載の「シラバス」参照
実 施 結 果: 同上掲載の「受講者アンケート」参照
企 画・運 営: 大学コンソーシアム大阪 研修部会推進委員会



竹中委員長

はじめに、竹中委員長より「本日の研修は『学び続けること』をテーマとしているが、人は往々にして学ばなくとも現状で何とかなると考えてしまいがちである。学び続ける意欲を保つためには、「効力期待(やればできそうだという期待)」と「結果期待(取り組めば良い結果につながりそうだという期待)」の2つを高めることを薦めたい。そのためには“これぐらいならできそうだ”というラインを設定し、“それを学ぶと自身や周囲、大学にとってどんなよいことが起こりそうか”をぜひ意識してほしい。本日の研修が、その好機となれば幸いである。」との挨拶があった。

続いて、佐藤講師、橋本講師より自己紹介が行われた。あわせて佐藤講師からは、本研修のプログラム内容と目標、また過去2回にわたって実施した初任者 SD 研修の振り返りについて概要説明があった。その後、アイスブレイクとして、受講者同士の自己紹介を行った。

本編前半では、佐藤講師より以下の講義が行われた。

■講義概要

<社会の変化と大学職員に求められる力>

1970年時点で17.1%であった大学進学率は、上昇の一途をたどり、2024年度は統計史上最高の 62.3%を記録した。しかし、2026 年度を境に、人口減少の進行が進学率の伸びを上回ることで、大学進学者数は減少に転じる見込みである。

この背景にある少子化は、長期的に社会構造そのものを大きく変化させる要因であり、大学もまたその影響を受けて、教育のあり方のみならず、職員に求められる役割も変わらざるを得ない。さらに、AI や DX の進展により、大学職員そのものが「代替」される可能性もある。変化が激しく、将来予測が難しい VUCA の時代において、これからの大



佐藤講師

学職員は、「脱事務方」し、「組織運営のプロ」へと変化を遂げ、代替され得ない力を磨く必要がある。

<大学職員が学び続けることの意義>

社会の変化が速く、かつ大きくなる中、知識や技術はどんどん陳腐化していく。新しいことを学び続けなければ社会の中で役割を果たし続けることは困難となる。「学ぶ」とは自身の有する資源(物的資源、人的能力資源、人間関係資源、情報資源)を豊かにしていくことであり、自分らしく生きる力を獲得し、未来への可能性の幅を

広げていくことでもある。

人は誰しも、自分と現状の間に必ずギャップを抱えているものであり、このギャップを埋めるためにも「学び続ける」ことは不可欠である。また、単に現状との差を埋めるだけでなく、「なりたい自分」そのものの幅を広げることを意識することも重要である。

さらに、業務そのものを学びの場として捉えることや、他者の経験から学び、視野を広げることによって成長は加速する。加えて、学ぶのに遅すぎるということはないということも意識してほしい。

自身の仕事を、単なる生計を立てるための手段(ライスワーク)としてではなく、自身の使命と思える仕事(ライフワーク)と位置付けることができれば、何を学ぶべきかが明確になるだろう。学び続け、成長することは、自身のためだけではなく、最終的には周囲や社会に貢献することにも繋がるはずである。

＜学びの棚卸しの必要性＞

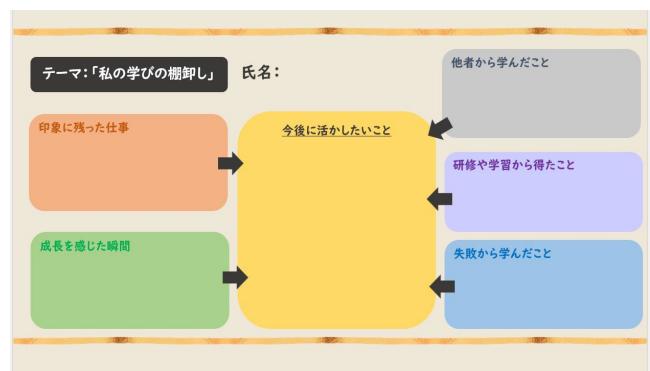
「学びの棚卸し」とは、日常の経験やこれまでの仕事などから得た気づきを整理することである。「学び」は単に積み重ねるだけでは十分ではなく、過去を振り返り、整理することで初めて未来に繋がるものとなる。棚卸しを行うことで、自身の得意なことや苦手なこと、また成長した部分が明確になり、それらを次の目標設定に活かすことができるようになるだろう。

本研修では、「印象に残った仕事」「成長を感じた瞬間」「失敗から学んだこと」「研修や学習から得たこと」「他者から学んだこと」を振り返り、それを基に「今後に活かしたいこと」を外在化してみたい。ワークの中で言葉や図、表にして“見える化”すると、自身の考えが明確化でき、さらにそれを他者に説明することで自身の中での理解を一層深めることができる。

(※ここで橋本講師のファシリテートのもと、ワークシートを用いて個人ワーク1を行った。)



橋本講師



個人ワーク 1 ワークシート

＜大学職員力を高めることの意義＞

「大学職員力」とは、学生や教員と協働し、大学をより良くするために必要な力のことであり、大学教育・研究・社会貢献活動を円滑に進めるための基盤を強化する力である。そのため、高等教育行政の理解、法令・制度の理解といった共通的知識に加え、配属部署に応じた幅広い専門性が求められる。

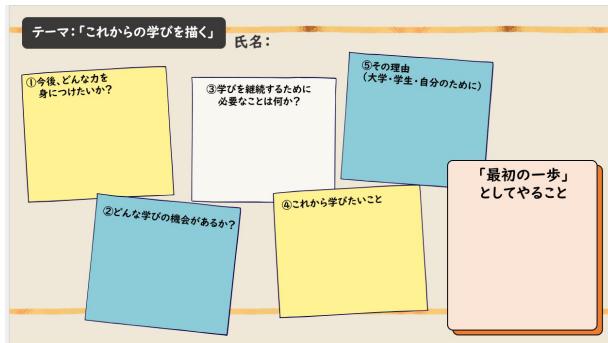
さらに、「コミュニケーション力」「課題解決力と柔軟性」「方向性を考える企画力」「アイディアを発想する力」「協働して新しい価値を生み出す力」「連携を推進するコーディネート力」「横断的に各部門を調整する力」なども大切な要素である。これらを養うために、小さな気づきを言語化し、可視化した上で共有することを勧めたい。こうしたプロセスは、全体の改善につながり、新しい価値やアイディアを生み出す原動力となるだろう。

大学職員には、これらの力をもって大学全体の運営を主体的に担い、教育の場、ひいては大学の未来をつくる

という役割があり、そこにこそ大学職員力を高めることの意義があるといえよう。また、社会をより良くするために仕事に取り組んでいるという意識も持つておいてほしい。

本編後半では、橋本講師の主導のもと、これから学びを描くための個人ワーク(個人ワーク2)として、「今後、どんな力を身につけたいか」「どんな学びの機会があるか」「学びを継続するために必要なことは何か」「これから学びたいこと」「その理由」についてワークシートに記入し、「最初の一歩としてやること」を導き出した。

続いて、「個人ワーク1」および「個人ワーク2」の成果についてグループワークによる共有を行い、その後、各グループ代表者の発表を通じて全体共有を行うことで、研修全体の振り返りの機会とした。



佐藤講師より、まとめとして「自身が大学職員として働いていて良かったと感じるのは、仕事を通じて他者や社会の役に立っていると実感できるときである。人は“自分のためだけ”よりも、“誰かのため”的なほうが本来の力を発揮することができるよう思う。また、過去の失敗から学ぶ(失敗が気づきや自己成長に繋がる)ケースも多い。過去の事実そのものを変えることはできないが、その解釈は変えることができる。また、未来は今を変えることで変わる。過去を学びの糧に変え、学び続けることを通して今を変え、よりよい未来を築いてほしい」との言葉が述べられた。

最後に、中村副委員長より閉会挨拶があり、「開会挨拶の際に言及された“効力期待”と“結果期待”的”うち、“効力期待”は特に重要と考えている。効力期待を持つためにも、本日の研修における到達目標がどの程度達成できたかの振り返り、職場でも共有してほしい。また『失敗』は、なぜそれが起ったのか、次はどうすればよいかなどについて学ぶことのできる非常に良い教材である。失敗を共有できる職場こそが良い職場であり、そのような職場づくりも目指してほしい」との言葉が述べられた。



研修本編終了後には、受講者と講師、研修部会推進委員による情報交換会が開催され、大学を越えたネットワーキングが図られた。あわせて、希望者に対しては「受講証明書」が配付された。

以上